

「人の助けになることがしたくって・・・」

—2010年9月南アフリカ・ナミビア訪問記—

岡野内 正

<オチベロ・オミタラ村 BIG 委員会>

「みなさんそれぞれが、委員会に参加した理由は何ですか？」もうそろそろ時間だし、最後の質問にして、と言われ、そう尋ねた。「わたしは、BIG のプロジェクトが始まった後で村にきたので、受給者ではないけど、村のひとのためになることがしたくって。」と言ったのは、最年少で二十歳くらいの女性委員。

「わたしは、BIG のお金で少し余裕ができるのなら、村人たちがそれを無駄に使ってしまうのが嫌だった。それで、なにか他の人の助けになることがしたくって。」続いて答えてくれたもう少し年長の女性委員。「私は、首都ヴィントフックで働いた経験もあるし、何か役に立てればいいと思って。」こちらは、インタビュー会場となった酒屋兼雑貨店主の34歳独身女性。

<小さな村の大きな第一歩>

アフリカ大陸の南端にある南アフリカ共和国の北側の西海岸に隣接する国ナミビア。その首都ヴィントフックから東へ百キロ。東隣の内陸国ボツワナやジンバブエとナミビア西岸にある大西洋の港湾都市を結ぶ国際幹線道路は、東方に向けて果てしなき地平線のサバンナを切り裂く。巨大なトラックやトレーラーと頻繁にすれ違う。道路の周辺は、ヒヒやイノシシ、シカ系の野生動物たちが車に激突するのを防ぐために、草が刈り込んであり、両側に続く草原には、針金の柵が延々と続く。…と、最初は聞いていたが、やがて、その草原のほとんどが、人口の6%ほどを占めるにすぎない白人の地主の土地であって立ち入り禁止を示すのだとも聞かされる。19世紀末からこの地を植民地にしたドイツ系白人あるいは、第一次大戦後にドイツからナミビアを奪ったイギリス、それを引き継いだ南アフリカ系白人の地主たち。1990年に南アフリカが撤退し、厳しい黒人差別のアパルトヘイト政策が廃止されてナミビアが独立して20年になるが、かつて奪われた土地はそのままなのだ。…その幹線道路を途中で北へ曲がり、やや北上したところにその村があった。ゼミの学生を中心とした総勢11名で訪れた目的地。BIG とは、すべての個人に無差別・無条件に毎月最低生活保障の可能な現金を給付する Basic Income Grant (ベーシック・インカム給付) の略語であり、オチベロ・オミタラ村は、世界初の BIG 支給実験が行われた人口千人ほどの村。

<100 ナミビア・ドルって？>

出発前に千葉の海浜幕張まで行って、アジア経済研究所の南アフリカの専門家から聞き取り。「100 ナミビア・ドルって、南アフリカの 100 ランドと同じだから、とても少ない額のはずよ。ほんとうに生活保障できるほどの額なのかしらね。」ケープタウンのドミトリーの安宿一泊 130 ランド。通りのファーストフード格安朝食セット 20 ランド。レストランに座れば、すぐに 100 ランドが消える。1 ランド=14 円くらい（円高になって 10 月には 11 円くらいに！）なので、そんなに日本と変わらない物価。ナミビアでは、南アフリカのランドがそのまま通用し、物価もほぼ同じ（南アフリカでは、ナミビア・ドルは受け取ってもらえない）。100 ナミビア・ドルって、1400 円じゃん！

<飢餓線 127 ドル>

首都ヴィントフックを後にする最後の日に、われわれが翻訳した実験村のレポートの筆者、ドイツ人牧師であり実験を進めた **BIG** 連合 (**BIG Coaliton**) の中心人物のひとりであったディルク・ハーマン氏とインタビュー。学生の一人がその質問をぶつけた。ハーマン氏いわく、「いい質問！ レポートにもあるけど、貧困線よりも下の、飢餓に陥らないぎりぎりの線が、ひとり 127 ナミビア・ドルなんだ。だから、100 ナミビア・ドルだと、飢えてしまう。でも、ナミビアでは、貧乏人は小家族じゃないよ。みなさんも村で見たと思うけど、狭い所に 10 人くらいはひしめき合って暮らしてる。ひとりでは飢えるけど、たくさんでいっしょに暮せば、食料も無駄にならず、規模の経済の原理が働いて、100 ナミビア・ドルでもぎりぎり暮せるんだ。ほんとうに微妙な、最低のラインだね。」

<村の **BIG** 委員会は自主的なもの？>

さらに別の学生が質問。「報告書には、実験を進めた **BIG** 連合が村の委員会を作った、って書いてあったと思うんですが、どうやって選んだのでしょうか？」ハーマン氏は、「あれ、そんなこと書いたかなあ。いや、それはいいはずだよ。絶対ないね。だって、**BIG** 連合の会議で、村のサポート委員会を作ろう、なんて話がでて、議論のすえ、却下されたんだもの。今回の実験は、政府が全国で **BIG** を導入できるかどうかの社会実験。全国の村にサポート委員会を作るなんてことは、政府にできっこない。だから、全国の村でやるのと同じ条件にしよう、ってことで、そういう介入はしないことになったんだ。…でも、ほんと、あんな委員会ができたことが、**BIG** の最大の成果かもしれないね。」

<あの村は、わたしの教区のガンだ！>

たぶん、実験が行われた村のことを聞くと、みんなも、BIG 委員会ができたことのすごさが納得できるでしょう、と話してくれたのが、次の話。「あの村は、まわりの白人農場主たちからは、犯罪者の巣窟っていわれていた。村人はほとんどが、まわりの白人の農場に雇われていた人たち。それが、年をとったり、人がいらなくなったり、労働態度がよくないなどの理由でクビになり、ダムの近くの国有地に住み着いたのが、あの村の起こり。ほんの十数年前のことだよ。まあ、20 世紀の初めの植民地化で黒人の土地を奪って、その後のアパートヘイト政策で偏見を叩き込まれた白人農場主が、黒人のことを犯罪者よばわりするのは、しかたないかもね。でも、私たちの教会（ルーテル教会＝ルター派キリスト教会）のあの地区担当の牧師に実験の話をしたら、こう言われた。『え？ あんなところで？ …あの村は、私の教区のガンなのに！』…ガンだとはひどいじゃないか、それじゃ、まるで、切り取って捨てるしかない人たちだっけっていわけ？ と、その牧師さんに抗議したよ。そしたら、牧師さんは言った。残念ながらその通りなんだからしかたがない！ と。そんな村だったんだ。あそこは。そんな村の人たちが、自分たちで、村の自治組織のようなものを造りたい、っていうことになったんだから、驚きだよ。」

<自分たちは、見捨てられてはいない！>

「自分たちの村は、自分たちは、世界から見捨てられてはいない。世界をつくる大事なひとりひとりとして、毎月、お金を受け取れるんだ。そういう、個人の尊厳が認められてるっていう意識が、なんだか、人々を勇気づけたんだね。プライバシーのこともあるので、今のように実名をだしたり、家の中まで訪問者に見せることはしないはずだった。でも、村人のほうから、ぜひ見てくれ、知ってほしいと言い出した。みなさんも見せてもらったでしょ。」とハーマン氏。そう、私たちは、3人ずつのグループに分かれて、BIG 委員の案内で、おんぼろのトタン板で四方を囲い、屋根のトタンに石をのっけただけの、ホームレスの仮小屋そのもののような村人の家の中を見せてもらった。私が見た家は、戸口に座って手仕事の女性の後ろに、バラック式の小屋には不似合いなつけっぱなしのテレビ（銀色のかかなり新式のやつ！）。左奥の寝室には大きめのベッドに衣類があちこち。右奥の部屋はベッドというか、高めのスペースにやはり寝具のようなものが。…

<発端>

村に入って、まず、大きな木の下での村の広場で、BIG 委員会の村人たち 8 人ばかりとお互いの自己紹介のあいさつ。そこで、実験の発端の話聞いた。…実験村の選定は、BIG 支給金目当ての村への移住を避けるために、極秘裏に行わ

れた。BIG 連合の代表になっているルーテル教会のナミビアでの最高の聖職者カミータ主教と連合のメンバーは、突然、村へ。そして、この木の下に村人に集まってもらい、BIG 実験について説明。次の3つの条件を示したという。①実験は、2年間だけ。②本日登録した村人にだけ支給。③実験結果は、全国レベルのBIG 導入のために役立てるので、村人は、報告書のための調査に協力する。…全員一致で条件受け入れ合意がとれるや否や、すぐに、支給者登録を始め、その日のうちに終わったという。村人9百数十名。2008年12月のこと。

<成果>

この1000名弱の村人に毎月支給された100ナミビア・ドル。それは、とにかく、この村を元気にした。詳しい内容は、学生たちと翻訳した2009年4月の報告書にあるが、そのポイントは、三つだ。

第一に、村人の体が元気になった。栄養失調の子供が劇的に減少。ナミビア全体と同じくこの村にも多いHIVエイズ患者を始め、慢性疾患の患者たちも村の診療所に薬を求めに来るようになった。

第二に、村の経済が元気になった。村人が依存していた、白人農場主が経営する店は、報告書の段階では、売上激減だったが、その後つぶれてしまった。村人が、小さな雑貨店や酒屋を次々と開設したからだ。BIG 連合にこのことで苦情を言いに来た白人農場主には、「自由競争だからしかたないね」と言ってやった、と、先のハーマン氏。村を歩けば、あちこちに、雑貨店兼酒屋、靴修理屋、パン屋、仕立屋の看板、…ベーシック・インカムをきっかけに始めたというレンガ造りのおじさんが、泥の塊を積み上げている。

第三に、村人の心が元気になった。村で話される5つの言葉をしゃべる老若男女からなる20名ほどのBIG委員会ができて、飲んだくれや無駄遣いを防ごうという機運。もちろん犯罪数も減少。小学校中学校に通う子供も増加。幼稚園までできた。

<いま>

村での実験は、2010年1月には終了した。実験を進めたBIG 連合は、それまでには、政府に対して、国レベルでのベーシック・インカム導入を決断させるつもりだった。しかし、「IMF や世界銀行の人も、ただでお金を配るのはちょっと、と言ってるし、私もそう思う」というナミビア大統領の心を変えさせることはできなかった。大統領は村を見に来ることさえしなかったという。では、実験後の村人たちは、再び、あの貧困に戻るのか。…BIG 連合は、かつての植民地支配国だったドイツや全世界に訴えた実験のための募金を勘定し、ひとり一か月80ナミビア・ドルに減額すれば、2011年の12月までは、支給継続が可

能だと判断した。

私たちが訪問した 2010 年 9 月、村の BIG 委員会の女性たちは、「首都に行って、大統領を説得するのよ！」と、不安を交えて興奮気味。…「ほんとうに貧しかった村人のなかから、りっぱなコミュニティ活動家が育っていて、すごい！コミュニティ開発で言うエンパワーメントっていうやつね！」と案内の BIG 連合事務局長の U さんに言えば、彼は、ニコツとして、「そうさ、これからやっとな普通のコミュニティ活動が始まるのさ！」

<労働組合連合の事件>

その U さんのケータイは、ほとんど、なりっぱなし。不審そうなわたしの目に、「申し訳ない！大事件が起こってね。」なんでも、ナミビアの BIG 連合を支える 4 つの全国組織（ルーテル教会、NGO 連合、青年組織連合、労働組合連合）のうち、労働組合連合が、BIG 連合を脱退したという。一週間前の話。ところが、組合の大会で、その方針を決めた執行部批判があいつぎ、今週になって、その執行部が辞任。脱退方針は撤回されたという。辞任した執行部の脱退理由は、ベーシック・インカムのような生ぬるいものではなく、土地改革こそ貧困対策に必要、と。執行部批判は、これに対し、白人財産の接収を禁止した憲法の規定で、徹底的な土地改革の実現が禁止されている以上、土地改革には時間がかかる。それまで、自分たちの貧困な家族や親族、友人は、どうやって生きていけばよいのか？ ベーシック・インカムこそ、植民地主義とアパルトヘイトの遺産で苦しむ黒人社会の大多数を救うために、いま、労働組合が取り組む課題ではないか、と。

<ナミビアの革命！？>

U さんの前任者のハーマン氏は、「これは、革命だよ！」と大評価。ベーシック・インカム導入推進に反対した組合執行部の見解は、ラディカルな改革のスローガンを言いながら、「タダで金をあげれば、怠け者になる」として、全国的なベーシック・インカムの実施に強硬に反対する大統領と重なるという。それに対し、執行部批判の議論の中からは、労働組合のリーダーだけでなく、ベーシック・インカムに反対するような大統領もやめろ！ BIG 連合の議長で、ベーシック・インカム推進のルーテル教会のカミータ主教を大統領に！ という声も出たという。…ナミビアの労働運動を動かしたベーシック・インカム推進の波は、新自由主義政策を受け入れて、世界的な不況のもとで貧困と飢餓に苦しむ南部アフリカ全体でみられるという。

<南部アフリカ諸国で、ベーシック・インカム革命！？>

我々の訪問中にあったモザンビークの食糧暴動（自由市場の食料価格の値上がりに反発する人々の暴動で、政府が値下げの価格統制を発表しておさまる）は、南アフリカのスラムにも飛び火し、打ちこわしにあったスーパーには、「ベーシック・インカムを！」という殴り書きも見られたという。南アフリカでは、かつてアパルトヘイト廃止直後に、ベーシック・インカムの導入世論が盛り上がった。だが、獄中闘争のリーダー、ネルソン・マンデラ率いる政治組織アフリカ民族会議（ANC）は、対抗する自由主義的な小政党がベーシック・インカム支持に回ったこともあって、導入を拒否し、しばらく、ベーシック・インカム熱は冷めてしまっていた。しかし、南アフリカの労働組合連合（COSATU）は、その時以来、ベーシック・インカム要求のスローガンを持ち続け、ANCでも、導入の声は高まっているという。さらにノーベル平和賞受賞者のツツ聖公会主教は、「ベーシック・インカムが実現しないなら、アパルトヘイトは持続しているのと同じだ。真実和解委員会の努力は帳消しになってしまう。」とまで語ったという。アパルトヘイト政策のもとでの権力者側について人々の暴力的弾圧の罪を問わないかわりに、真実を証言して正義を誓わせ、国民の和解を追及した真実和解委員会。それを推進した中心人物のツツ主教がそこまで言ったとすれば、事態は深刻。…実際、ケープタウンでの短い滞在の間に見た貧富の格差は、ナミビアと同様にすさまじいばかり。確かに、アパルトヘイトは、いや、ほとんど500年の歴史を持つ植民地支配の歴史は、いまだに続いている。

<ジンバブエの失敗>

「実際にナミビアに来てみて初めてわかったけど、植民地支配は、いまでも続いているのですね。白人に取られた土地が取られたまま。でも、土地を取り返すのに、ジンバブエのようにやれば、大混乱になるし。」とBIG 連合現事務局長 U さんに水を向けた。ジンバブエもかつてローデシアと呼ばれたアパルトヘイトの国だったが、アパルトヘイト廃止後の黒人大統領が、政治的失策をカバーするために黒人による白人農場の占拠と白人財産の接収を扇動して暴動になり、経済の中枢を占めていた白人が次々と国外脱出。国際的非難と制裁を受けて、ジンバブエ経済は破綻。リヤカーに札束を積んで買い物に行くほどのスーパー・インフレ。…「うん、あれはひどかった！意図はいいのだけど、やり方が完全に間違いだった。」と U さん。ジンバブエの失敗を見ている南部アフリカの人々は、土地改革が簡単ではないことをよく知っている。だからこそ、土地がなくても食っていけるベーシック・インカムに、植民地支配の継続からの脱却の道を見出したのではないだろうか。

<U さん>

その U さんは、ブラジルのベーシック・インカム国際学会で出会ったルーテル教会のカミータ主教から紹介され、我々のナミビアでの調査・研修旅行をアレンジしてくれるはずであった。が、日本からメールを出しても、返事が来なくなる時がよくあり、やや心配な人。…と置いていたら、やはり、我々のナミビア到着後に連絡が取れなくなり、ほぼ 3 日間、教会が運営する首都郊外の宿に放置のはめに。…ようやく会えて、でっぴりと太った U さんと話すうちに、いろいろわかってきた。とにかく忙しい。BIG 連合事務局長として、先述の労働組合連合脱退事件に取り組みながら、その 3 日間は、南アフリカのヨハネスブルクにある大学の大学院で開発学の社会人院生として、スクーリングを受けていたのだ。

実験村に行く一本道を高速でぶっばなしながら、ハンドル片手に、ときどきケータイで話をする彼の運転を助手席から横目で見ながら、ハラハラしていると、「ほら、あそこを右に入っていくと、政治犯の収容所だ。あとで寄ろうね。」「政治犯？ アパルトヘイト時代のかしら？」と聞けば、「もちろんそうだよ。今はもうない。俺はあそこにいたんだ。」

<政治犯収容所>

昼飯を食べる間もなく、実験村を後にしたのはもう 3 時過ぎだったと思う。車内で、その朝ガソリンスタンド付属コンビニで買ったサンドイッチをほうばり、「政治犯収容所に行けるかしら？」と言えば、彼はニコツとして「もちろん！」

『ドイツ人墓地』という標識のある道を行き、舗装の途切れる道が小高い丘に登ると、どん詰まりに鉄条網を張った金属の柵の門。「丘の向こうの墓を見てくれ！ドイツ人植者の墓はいまでもあのおりだ。しかし、この土地に住んでいた我々黒人の先住民の墓は、いまだに白人入植者の農場の柵の中だ。最近、先祖の墓に埋葬したいというこの地区の先住民からの申し出があったが、外国に住む白人地主から拒否された。住民たちは納得せず、主教に訴えて、係争中だ。」と U さん。顔見知りらしいおじさんが中から現れて門を開けてくれる。「ああ、この建物だ。僕は 17 歳で、高校生だったが、学生自治会の役員をしていて、アパルトヘイト反対、ナミビア独立を求めるゼネストを労働組合などといっしょに実行しようと自治会連合を結成したんだ。…それが盛り上がったので、ストをやってる高校に軍隊が乗り込んできて、片っ端から逮捕された。目隠しをされて、中心的活動家だけが、ここに連れてこられた。…お前は何歳だ？と言われて、17 歳だ、と答えると、いきなり張り飛ばされて床にたたきつけられた。今とは違って、ぼくは、背が高くひょろっとしていたので、嘘だと思われたんだ。ははは。…そのあとは、パンツだけの裸にされて、ほら、あっちの建物に放り込まれた。冬だったのでほんとうに寒かった。死ぬかと思ったね。」

その建物から突然、妊娠した女性と子供が現れた。「あれ、今はここは？」と聞けば、「不法入国者の収容所なんだ。」

<学生運動>

1990年のナミビア独立、アパルトヘイト廃止後、Uさんは、高校から大学に進み、学生自治会連合の活動家として大活躍。「あのときつかまった仲間たちは、ほとんど政治家になって、閣僚や大臣になったね。でも、ぼくはNGO活動家の道を選んだ。なぜかって？ はは！ 政治家につきものの腐敗がいやだからさ！」反対運動に参加して弾圧された被害に対する補償金はもらえないの？と問えば、「もらえるけど、僕は、NGOに就職できたから、もらってなかったんだ。殺されたり、障害者になって仕事がない人もたくさんいるからね。国のお金なんだから、そっちに回したほうがいいでしょ。ところが、先日、閣僚になってすごい給料をもらう友人たちが補償金をもらっていることを聞いて、驚いたね。僕も申請しようかと考えてるとこだ。」

そんなUさんの姿勢は、今の学生運動活動家たちにも有名のようだ。首都のりっぱな青年会館で行われた若者組織との交流会。ゼミの学生たちが、「普通の学生」で、なんの組織も代表していないことで拍子抜けした20人ほどのナミビア側の参加者は、みんな学生自治会の役員や、自治会連合の役員。日本では学生自治会はほぼ壊滅で、一部では残っていても、普通の学生からは「変な人」とみられる。就職には不利になるのでみんな近づかない。…そんな話を聞いて、ナミビア側リーダーが、「ナミビアでは、むしろ有利なのに！」と言えば、Uさんが「俺以外はね！」と茶々を入れて、大爆笑。…革命後の出世の道を拒否して、あくまで民衆の側に立って闘い続けようとするUさんを見る学生活動家たちの温かいまなざし。…「あんなにたくさん来るとは思わなかったよ。まったく違う世界のことを知るって、いいことだよ。ありがとう！」と、帰りの車でUさん。

<貧困者教会>

BIG 連合の重要な構成組織であるルーテル教会の日曜礼拝に参加したい、という私の望みに、Uさんが連れて行ってくれたのが、郊外の山の上の教会。むき出しのコンクリートのひよろ長い体育館のような建物が、ほとんど木のない山頂にそびえる。その周りは、一面のスラム。不法占拠住民のトタン板で四方と天井を囲み、屋根に石を置いたバラック。…実験村で見たものと同じ造りの小屋が、あちらのピーク、こちらのピークと見渡す限りの草地となっている山肌にへばりついて点々と、しかし全体としてぎっしりと迫ってくる。「君たちの宿の近くにも教会はあるけど、あんな金持ちの教会は嫌いだ。貧乏人ばかりの

この教会を見せたかったんだ。」と U さん。…バラックから一張羅を着て着飾った人々、杖をついた老人、赤ん坊をかかえた女性。徒歩で教会に向かう貧しき人々に、土煙を浴びせて車で追い越すのが申し訳ない。…中に入ると、歌の殿堂。あちこちに座った男声、女声が自然にきれいにハモって数百名で讚美歌のアカペラ合唱。それで集会が進行。「君たちのことを紹介するし、ぜひベーシック・インカムのことをしゃべってね！」という U さんの求めに応じて、「世界的な実験の成功を聞いて、日本から駆け付けました！」と英語で演説。U さんは、それをこの地域でいちばん通じる、舌打ち音（クリック・サウンド）を持つダマラ・ナマ語に翻訳。

<カミータ主教>

ベーシック・インカム実験の成功が、国際的に有名になっていることをナミビア国民と大統領たち政治家に知らせ、導入を促進したい、というのは、すでに2児の母となっている主教の娘さん（今は旅行社をやっていて、首都の一日観光につきあってくれた）も強調。…独立前、彼女が小学生だったころ、アパートヘイト反対運動の中心的活動家だった父が、テロリストとして指名手配され、そのビラを持つクラスメイトにいじめられたこともあるの、と。そのあと、父は捕まり、半年ほど牢屋に入れられ、拷問されたという。

その主教の事務所で、主教への独占インタビュー。カミータ主教とは、今年6月にブラジルのサンパウロで開催されたベーシック・インカムの国際学会で出会い（彼はナミビア実験村の報告、私はグローバル・ベーシック・インカムの試算を報告）、ナミビアの実験村訪問を快諾してもらって以来。最後の日には、小学生くらいの二人の孫もいっしょにサファリ公園に行き、ライオン・フィーディング付きのディナー・パーティーも。

<アパートヘイトをなくすために神学を…>

「どうして牧師になろうとしたのですか？」とディナーの席で問えば、ニコツとして、半生を語ってくれた。「アパートヘイトをなくしたかった。そんな時に、ラテンアメリカの解放の神学のことを聞いた。これだと思ったね。アパートヘイトをなくすには、神学の勉強をするしかない、と。」そして、神学の大学に行き、ドイツにまで留学して博士号をとり、ルーテル教会では初めての黒人主教となった。そう、この人は、最初から、黒人を差別して支配するアパートヘイト政策のある社会の仕組みを変えたい、という確信犯の革命家だったのだ。そんな彼を受け入れて、育てた、神学の世界って、すごい、と思えば、彼が釘をさす。「教会の中でも、アパートヘイトに反対の人ばかりではなかったからね。ずいぶんたいへんだったよ。」

<ベーシック・インカムの展望>

主教事務所でのインタビューでは、学生の質問に答えて今後の展望を語った。

「アパルトヘイト政策は廃止されたが、経済の仕組みはそのままだ。残念だが、政府は腐敗している。ベーシック・インカム実験は大成功。貧困にあえぐ民衆は、お金の使い方をよく知っていることが証明された。ナミビア経済には、その民衆に配るだけのお金はあるし、政府にも、その力はある。民衆の力で、政府にこの事実を認めさせ、全国的な導入を決断させることが今の課題だ。」噛んで含めるような語り口。「深刻なのは土地問題だ。黒人大衆が、日々の生活のために薪を集めてくる森も、先祖の墓も、白人入植者に奪われ、柵で囲われたまま。入ると、逮捕されるありさまだ。…そんな郷里を後にして、町にでてきても、恐ろしいスラムの生活だ。…私も多くの土地問題にかかわっているが、もう、とても平和的に解決できないほどだ。」

<元首相専属運転手>

アパルトヘイト廃止・独立後の政府の腐敗、土地問題の未解決という認識は、「そう、俺は、自由の闘士（Freedom Fighter）だよ」と胸を張るアパルトヘイト撤廃・独立の武装闘争に参加した70歳を超えるじいさんも同じ。「いちばん悔しいのは、小学校がいまだに無料じゃないことだ。わずかな額だから払えというが、貧乏人は、実際に小学校に行っていない。これじゃ何のための革命だ！」郊外にある教会が運営する私たちの宿からは、どこに行くにも車が必要だ。そこで、そこそこのお金を払って、なぜか宿に併設された老人ホームに通ってくるじいさんの車をじいさんの運転でタクシー代わりによく使った。静かな運転が実に手慣れているので、聞けば、首相専属の運転手をしていたこともあるという。

今の政府は、白人にそれほど土地を取られなかった北のやつらが多くって、おれたち南の出身のものにとって深刻な土地問題には取り組まないのさ、とも。

<不思議の観光ガイド>

主教の娘さんが連れてきた市内観光のガイドのお兄さん。我々を教会に案内して言う。「そう、りっぱな教会だ。みんな、貧乏人からお金を集めて造られた。貧乏人は、お金を差し出す。教会はどんどんりっぱになる。貧乏人はどんどん貧しくなって天国へ行く。植民地時代からそうだ。みんなどう思うかな？ あっはっは。」ちょっと言い過ぎじゃない？というふうに顔をしかめて見せる主教の娘さんに、ニタツとしながら、とにかく陽気。大学では工学部だったが、「歴史は、ほんとうにおもしろい！」と。貧乏人の不法占拠地域に入り、道路

際のもつり列を見ると、「貧乏人の食事を試してみたいだろ？さあ、行こう！」と、車を止め、ぞろぞろと。背後のスラムのバラック群から砂埃が舞い上がるが、鍋のふたをとって、見せてくれる。「これが、典型的な丸い揚げパン。お、これは、ヤギの頭だね。…みんなで少しずつ味見しよう！」冷えた揚げパンは、味気なく、ヤギの頭は、ゴムのような面の皮に砂埃が混じって、ざらざら。カメラをもって別のもつりの鍋をのぞいていた同行学生の本さん、「ねえ、わたし、買えっていわれたので、お腹いっぱいだしいらない、っていったら、私はお腹すいてるの、って叱られた！」と泣きそうな顔。

<宿の本さん>

南アフリカ生まれの黒人で、ボランティアとしてナミビアに3年間、教会の宿の管理人をやっているお兄さん。おそらく子連れで再婚した母親の相手は、南アフリカのかなり裕福なユダヤ人。「俺は、ユダヤ人として育てられたし、ユダヤ人だ。毎年イスラエルにも行くよ」、と。…ナミビアのやつら、大嫌い！ほんとにアフリカ人だよ、こいつら。時間守らないし。俺は南アフリカの大学を出て、ドイツでもアメリカでも勉強した。もうそろそろここを出るよ。たくさんだ！…南アフリカの傑作映画を観るかね？と彼の部屋でDVD観賞会。とても有名だという白人のお笑い芸人が、黒人に変装して、事実上白人専用になっている会員制ゴルフ場に登場し、「ほう、俺の国ジンバブエじゃ絶滅した種属がいるね！」などとさんざん挑発し、白人のおじさんが殴りかかったところで、カメラクルーが登場し、種明かしをして、みんなで笑う、というもの。黒人の失業者、浮浪者、不法占拠バラック住民などをネタに、政治権力を失った白人社会の人種偏見を徹底的に笑いのめすという趣向が次々と。

<ケープタウン>

ナミビアまでの飛行機は高いので、ケープタウン往復。ナミビアまでは、夜行バス（というより片道20時間の一日バス）で往復した。サンパウロの学会で知り合った南アフリカの研究者のついで、ケープタウンでも観光名所と、タウンシップ（貧民街）・ツアー。町ではさまざまの顔が入り混じっても、住宅となると、アパートヘイト以来の、白人、カラード（インド、マレー、中国、混血系）、黒人それぞれの居住地差別がほぼそのままになっていることを確認。ナミビアよりは整備されているが、ずっと密集した黒人の不法占拠住宅群。…イベントの時に設置されるような、簡易共用トイレがずらっと並ぶ。そんなトイレでさえ、最近のスラム改善政策でようやく設置されたとか。

我々が宿泊した繁華街のバックパッカー向け安宿の2階にあるパブの警備員は、コンゴ難民。内戦を逃れて、南アフリカまで逃れてきて、すでに6年。夕

方6時にはいって、朝の6時まで一睡もせずという過酷な勤務。

ケープタウンを去る前日の夕方、閉館前の一時間で、かつての奴隷市場を改造した奴隷博物館へ。500年前にポルトガルがこの地に現れて植民地にし、やがてオランダがここを占領し、…その間、ポルトガルやオランダの植民地になった、中国やマレー半島やインドネシアの島々、インド、東アフリカから、大量の奴隷がここ、ケープタウンに送られた。奴隷は、さらにここから、ブラジルやカリブ海、アメリカに向けて売られていった。

19世紀は、奴隷貿易と奴隷制の廃止。20世紀は、普通選挙権。21世紀は、ベーシック・インカム。…人類史の進歩と人権運動の課題がそういうものだとすれば、この南部アフリカでは、3世紀に及ぶ人権運動の課題が、折り重なって歴史が悲鳴をあげている。貧困と飢えに苦しむ人々の悲鳴の中で、実験村の女性たちの発言は、人類の希望だと思う。まずは、この希望を世界に伝えること。…そして、ベーシック・インカムのなかった野蛮な時代を、博物館に展示する。さて、そんな世界にどうやってもっていこうかな。(2010年11月22日)